

2019年度
地域課題の発見及び解決のための
人材育成手法の研究に向けた実践的講座
報告書

2020. 3. 31

目次

1. 事業概要

- 1-1. 目的と概要
- 1-2. 全体スケジュール
- 1-3. プログラム
- 1-4. 体制
- 1-5. 広報手段
- 1-6. 受講生

2. 講座

- 2-1. 目的と概要
- 2-2. 講座1：キックオフ
- 2-3. 講座2：+クリエイティブでプログラムの魅力を高める
- 2-4. 講座3：人を巻き込むコミュニティデザイン
- 2-5. 講座4：SDGsを仕事につなぐトランスフォームデザイン
- 2-6. 講座5：未来をつくるリサーチデザイン

3. 演習

- 3-1. 目的と概要
- 3-2. フィールドワーク準備
- 3-3. 中間発表
- 3-4. 最終発表

4. 結果

- 4-1. アンケート結果

5. まとめ

- 5-1. 成果と課題
- 5-2. 今後に向けて

6. 資料

- 6-1. 最終プレゼンスライド
- 6-2. アンケート

1. 事業概要

1-1. 目的と概要

SDGsやSociety5.0といった社会やまちづくり変革のキーワードが浮上している。大阪・関西エリアにおける地域・社会環境の変化（少子高齢化、コミュニティなどの地域力の低下、労働力不足、外国人受け入れ増加、空き家増加 等）に対応しうる人材を育成する手法について、実践的な研究を行う。

ソーシャルデザインの最前線で活躍するゲスト陣による「特別講座」と、地域でのフィールドワーク「演習」を通して、現場の課題解決に必要な「実践知」とその前提となる考え方としての「マインド」を学ぶ、短期集中型の実践プログラムを実施する。概要は以下の通り。

期 間：9月7日（土）-12月21日（土）

場 所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

住 所：大阪市北区大深町3番1号 グランフロント大阪ナレッジキャピタル タワーC 7階

定 員：25名（選考があります）

参加費：20,000円（全8回分）

対 象：18歳以上50歳未満、すべての講座・演習に参加する意志のある方

*受講できない日程ある場合は要相談。

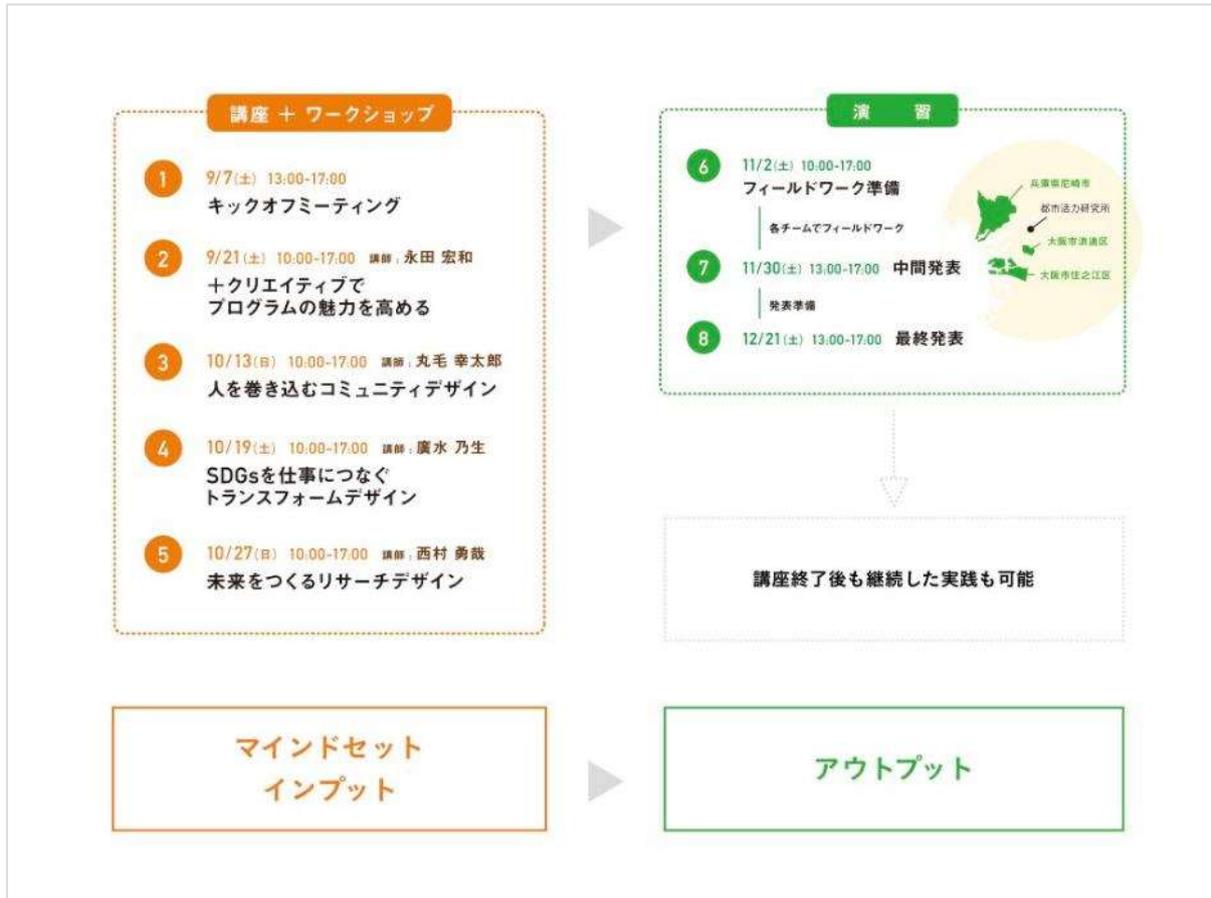
1-2. 全体スケジュール

実施概要に基づき、以下のスケジュールでプログラムを実施した。

8月9日	事前説明会@OBPアカデミア
8月20日	事前説明会@ツムグバ
8月24日	事前説明会@都市活力研究所
8月28日	申込締切
8月31日	参加者確定
9月7日	初日日
12月21日	最終日（最終発表）

1-3. プログラム

全体スケジュールに基づき、以下の通りプログラムを実施した。



Session 1 : キックオフミーティング

【日程】 9/7(土)13:00-17:00

【ファシリテーター】 NPO法人Co. to.hanaスタッフ

Session 2 : +クリエイティブでプログラムの魅力を高める

【日程】 9/21(土)10:00-17:00

【講師】 永田宏和さん

Session 3 : 人を巻き込むコミュニティデザイン

【日程】 10/13(日)10:00-17:00

【講師】 丸毛幸太郎さん

Session 4 : SDGsを仕事につなぐトランスフォームデザイン

【日程】 10/19(土)10:00-17:00

【講師】 廣水乃生さん

Session 5 : 未来をつくるリサーチデザイン

【日程】 10/27(日)10:00-17:00

【講師】 西村勇哉さん

Session 6 : フィールドワーク準備

【日程】 11/2(土)10:00-17:00

【ゲスト】 各地域のコーディネーター

【ファシリテーター】 NPO法人Co. to. hanaスタッフ

Session 7 : 中間発表

【日程】 11/30(土)13:00-17:00

【ファシリテーター】 NPO法人Co. to. hanaスタッフ

Session 8 : 最終発表

【日程】 12/21(土)10:00-17:00

【ゲスト】 各地域のコーディネーター

【ファシリテーター】 NPO法人Co. to. hanaスタッフ

1-4. 体制

実施体制は以下の通り。

主催：公益財団法人都市活力研究所、NPO法人Co. to. hana

企画運営：公益財団法人都市活力研究所、NPO法人Co. to. hana

協力：地域コーディネーター

- 渡邊芳枝さん（住之江区協働まちづくり課長）
- 平井裕三さん（浪速区まちづくりセンター：地域まちづくり支援員）
- 鶴留朋代さん（尼崎市三和商店街 副理事長、ちゃりこい代表、日新天ぷら店主）

1-5. 広報手段

受講生の募集と、活動の周知のために、以下の広報活動を実施した。

1. 講座案内チラシ

目的：受講生の募集、活動の周知

対象：行政関係者、ハブ的施設の管理者及び利用者

配布部数：2000部

配布先：主催団体の関係施設、関係者の関係施設（kitto）、協力施設（各種行政窓口、コワーキングスペース）など

2. facebookページ

目的：受講生の募集、活動の周知

対象：本講座の対象に該当する方、特にSNS等から情報収集をしている方

制作物：バナー、及びfacebookページ

3. SNS広告

目的：事前説明会の広告を実施

対象：本講座の対象に該当する方、特にSNS等から情報収集をしている方

期間：2019年7月〇〇日～2019年8月〇〇日

4. 事前説明会

日程：2019年8月9日

会場：OBPアカデミアセミナールーム

参加人数：16人（内8名申込）

日程：2019年8月20日

会場：TUMUGUBA

参加人数：3人（内2名申込）

日程：2019年8月24日

会場：公益財団法人都市活力研究所セミナールーム

参加人数：10人（内7名申込）

5. メールマガジン

対象：都市活力研究所メールマガジン登録者、NPO法人Co. to. hana登録者

6. ウェブサイト

掲載：都市活力研究所、NPO法人Co. to. hana、OBPアカデミア（事前説明会のみ）

1-6. 受講生

募集・選考の結果、19名が受講した。属性は以下の通り。

<性別>

男性9名

女性10名

<職種>

企画営業、デザイン系プランナー、アートディレクター、WEBディレクター、会社員、土木技術職、薬剤師、公務員、研究開発、生活介護、ファイナンシャルプランナー、デザイナー、エンジニア、大学生

<志望動機>

- ・課題解決に必要なマインド面と実践の2つを一連の流れを学びたい
- ・地域資源の活用，地域の課題発見，課題解決を行う際の新たな知見を得る
- ・地域課題を解決するスキル、経験値を得たい
- ・現在の業務に今後活かせる
- ・自分の実践経験の薄さによる限界を痛感している
- ・ノウハウを地域で困っている方々に還元できるよう模索したい
- ・自分の住んでいる地域や生まれ育った地域のために、自分の経験やスキル、時間を使って社会課題を解決し、町に貢献したい
- ・同じ課題に悩み取り組んでいる仲間を見つけたい

2. 講座

2-1. 目的と概要

ソーシャルデザインの最前線で活躍するゲスト陣による「特別講座」と「ワークショップ」を通して、ソーシャルデザインの基礎となる知見、考え方、手法、取り組み方を学ぶ。初回キックオフを含めて、全5回の講座を実施した。

期 間：9月7日（土）-10月27日（土）

場 所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

住 所：大阪市北区大深町3番1号 グランフロント大阪ナレッジキャピタル タワーC 7階



2-2. 講座1：キックオフミーティング

<概要>

参加者同士の関係づくりとSMD講座の目標設定をことを目的としてワークショップを実施した。

日程：9/7(土)13:00-17:00

場所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

ファシリテーター：NPO法人Co. to. hanaスタッフ

<主な内容>

イントロダクション

SMD講座の趣旨や全体像を説明と、受講生同士の自己紹介を実施。また、ソーシャルデザインへの関心度や取組度を共有するためのミニワークショップを実施することで相互理解を深めました。

ハイポイントインタビュー

受講生同士の関係構築とSMD講座への動機づけを高めることを目的として、人生のストーリーや価値観を聞き合うインタビューを実施しました。インタビュー後にはインタビュー相手を他の人に紹介するワークも実施しました。

ビジョンワーク

SMD講座の目標設定をすることを目的として、各自がビジョンを言語化・可視化するワークを実施しました。まずは各自が感じている「課題」を付箋に書き出します。次に課題がすべて解決された未来像を想像し、可視化します。そして、グループをつくり、一人ずつ自分が可視化した未来像を発表します。聞いているメンバーは話を聞きながら発表者のビジョンを付箋に「言葉」で書いていきます。発表後に付箋を発表者に渡すことで、発表者は自分の未来像をチームメンバーの付箋を通して言語化することができます。これをグループメンバー全員が繰り返していきました。

ミライマップ作成

ビジョンワークを通して描き出した未来像から逆算して、SMD講座の位置づけを考えます。仕事やプライベートがあるなかで「なぜSMD講座を受講するのか」という意味を各自が考え、可視化していきました。

ラップアップ

作成したミライマップを全体で共有しつつ、今回のワークショップを通しての気づきを振り返ります。その後、次回講座の概要や今後の連絡方法等について共有しました。

<参加者の主な感想>

- ・自分の心に残っている体験や、今回プログラムに参加した理由を言語化することで改めて、自分と向き合うことができた。
- ・プログラムの進行がスムーズで、話しやすい場になっていた。ファシリテーターの役割の重要性を再認識。
- ・「地域を良くしていきたい」「たくさんの人と繋がりたい」「よりよく生きたい」など、熱量を持ち行動しようとする方々と対話することができた

- ・ペアインタビューと他己紹介で発見・学びがあった
- ・自分が何を学びたいのか、可視化できた



2-4. 講座2：＋クリエイティブでプログラムの魅力を高める

<概要>

社会課題を解決する活動を生み出すということは、クリエイティブな活動をデザインすることでもあります。ここでは、日本全国で取り組む実践事例やソーシャル・デザインにおけるフィロソフィーから、クリエイティブな活動を生み出すための視点やステップをワークショップを通じて学びます。

日程：9/21(土)10:00-17:00

場所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

講師：永田宏和さん

<主な内容>

「地域活性化」ではなく「地域豊穡化」

人口を増やしたり賑わいをつくるまちづくり（地域活性化）から、もっと質的な豊かさを育む地域づくり（地域豊穡化）が大事です。そうすることで、地域の人たちがお互い仲良く、生き生き暮らす元気なまちになっていくと考えています。

「地域豊穡化」に不可欠なこと

「地域豊穡化」には「土の人」「風の人」「水の人」の存在が不可欠であり、それらを介在する「種＝コンテンツ」をどう育てていくのが最も重要です。「土の人」とは、その土地に暮らし、活動し続ける人のことです。「風の人」とは、かつて地域コミュニティの存在という形で肥えていた土は、現在は枯れてしまう。そのような、ひ弱な土地に外部から「種」をもたらし、刺激を与えるのが「風の人」の役割です。「水の人」とは、運ばれてきた「種」に水をやり続け、育てていく人のことです。地域愛に溢れ、地域に寄り添い、支援していく人です。地域豊穡化づくりのサイクルの中で表面化してきた課題が、「風の人」がいないことです。風が枯渇しているということは、いい種が枯渇しているということでもあります。つまり、いま社会に求められる人とはズバリ「種を創れる人」だと考えています。

「関わりしろ」「余地」をつくる

強い「種」をつくるための要素のひとつが「不完全プランニング」。言い換えると、完成されたパッケージになっていないことです。地域支援で重要なのは、地域に主体的に関われるプレーヤー・担い手を増やすことです。穴だらけ、隙だらけの不完全な種だからこそ、地域にいるいろんなステークホルダーが入れる「関わりしろ」や「余地」が生まれます。みんなが関われる、みんなと一緒につくれる、そして「みんなのもの」になり定着する。たくさんの人を巻き込みながら、主体性を持って関わることのできる仕掛けづくりとなっているのです。

「＋クリエイティブ」で魅力を生み出す

もうひとつの要素が「+クリエイティブ」という準備を大事にすることです。どんなに関わりづくりの仕掛けをつくっても、興味関心を持てるものでないと関わりにまでは至りません。「強い種」における強度とは、楽しい、美しい、ワクワクする、といった「魅力」のことです。心動かされるような魅力を生み出すために必要なのが「クリエイティブ」。創造性やイノベーションにまつわる言葉ではありますが、必ずしも「新しい何かをつくり出す」ということだけではありません。「今あるものを壊す」ことから、クリエイティブは始まります。場数を踏み、チームで取り組む経験を通じながら、これまでの事業やプログラムを改めて考え直していただくことが大切だと考えています。

<参加者の主な感想>

- ・アイデアの出し方から、それを企画にするまでのノウハウを聞いたこと
- ・実践に伴ったお話が多く大変有意義でした。実際に活動されている方だからこそそのお話が聞けて本当に良かった。
- ・参加者同士の参加動機が共有出来た。
- ・講義とワークショップと懇親会で、知らないことを知り、実践して失敗し、自分の活動に当てはめて、質問できる時間を頂き、丸一日で、大きな学びがありました
- ・ソーシャルデザインだけでなく、自身の業務遂行に於いても非常に参考となる話が多く、ヒントや示唆を得ることができた。



2-5. 講座3：人を巻き込むコミュニティデザイン

<概要>

どのように人を巻き込むのかは、コミュニティづくりに取り組む上で、最も大切なことです。この講座では、活動のフローから、ワークショップや話し合いの進め方、活動をマネジメントする上でのポイントまで、現場で活かせる具体的なデザインの仕掛けと仕組みについて学びます。

日程：10/13(日)10:00-17:00

場所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

講師：丸毛幸太郎さん

<主な内容>

コミュニティデザインとは

コミュニティデザインとは「人と人の新しいつながりをつくることで地域の困りごとから社会の課題までを楽しく、正しく、解決するアプローチ」のことで、近年、複雑化する社会課題に対して市民自らが活動していく機運が生まれ、それぞれの地域で動き出す事例がみられるようになりました。そうした中で重要視されるようになったのが、コミュニティデザインの考え方です。一人ではなく「みんな」で、「納得できる答え」をつくりながら前に進んでいく。そのプロセスをサポートしつつ、最終的には地域の担い手一人ひとりが自分たちの手で活動を続けていけるような関わりを築いていくことが求められています。

「ソーシャルグッド」な活動

多くの人を巻き込んでいくためには、理解や共感、納得感を共有できていることが必要です。そのため考え方が、目の前の課題を解決していく「フォアキャストイング」、そして「欲しい未来」「ありたい姿」から逆算する「バックキャストイング」です。これらに基づきながら、どんな取り組みでもまずはやり切ること、強みや資源を活用しながら多様な人材を巻き込んでいくこと、そして伴走支援の体制をつくっていくことが求められます。

「余白」をつくる

活動の中身を決めすぎず敢えて穴をつくっておくことで、それぞれが自分の好きなことや得意なことを活かして関わる余白が生まれます。そして、地域との関係性の中で活動できる場を一緒になってつくっていくことで、一人ひとりに応じた活躍の舞台が生まれます。前に立って教えたり決めたりするのではなく、問いかけの中でともに学び、ともに成長していく姿勢で関わるのが大切です。

「ワクワク」を大事にする

どんなに意味のある活動でも、「ワクワク」するような楽しさがなければ人は集まりません。楽しさが失われると活動はルーティン化し、停滞してしまいます。決まった活動をするのではなく、ワークショップやフィールドワークといったプロセスから関わる企画設計を大事にすることが必要です。魅力を可視化したヴィジュアルを打ち出すことも、共感を得る要素となります。

<参加者の主な感想>

- ・いままで考えてもいなかった「質問を作る」というワークショップであたらしい気づきができた。
- ・講座とワークショップのバランスが良く、考える時間や共同学習を通して学びが深まった。

- ・問いをたてることの難しさを感じた。また、その問いを理解してもらい答えを出し合うことの大変さも分かった。自分の考えや視点を共有化してもらうためには工夫や受け手の立場にたった発信が必要だと感じた。
- ・プロジェクトに関わる方々のエンパシーを高めるための「余白」を大切にされていることが印象的でした。



2-6. 講座4：SDGsを仕事につなぐトランスフォームデザイン

<概要>

今の時代の仕事に欠かせないのが「SDGs」という考え方です。この講座では、SDGsの基本的な捉え方から、それが私たちに与える影響、世界的アウトドアメーカーでの実践事例、そして仕事で実践するための戦略などについて学びます。

日程：10/19(土)10:00-17:00

場所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

講師：廣水乃生さん

内容：講座、質疑応答

<主な内容>

SDGsの捉え方

SDGsの17のゴールは、バラバラにあるのではなく、新しい世界への変容をする上で達成しているべきゴールのリストです。ビジネスセクターでのKPIのように、その数値だけを追えばいいという理解がされがちですがそれは違います。ここでの数値が、「誰ひとり取り残されない世界」を達成していると仮定した時に、達成しているであろう数値を設定しているということを忘れてはいけません。SDGsを理解するためには、ゴールだけではなく全体の中での位置づけを理解した上で達成しようとするのが大事です。

SDGsの全体像

SDGsの問題は大きく3つの問題が影響しあっています。環境問題、社会問題、経済問題です。

環境問題は気候変動と生物多様性が2大テーマです。気候問題はCO2排出量が1つの分かりやすい指標。CO2排出量は、地下にある炭素を使わないようにするか、すでに使われている炭素を地中にもどすか、2つの方向性があります。人間が利用している資源を再び資源にもどす機能のことをエコシステムといいます。多様な生物が関連しあい、網目のように連鎖していることで維持されています。エコシステムの多様さは高度に複雑なため把握することはできません。そのため、生物が絶滅したり、過度に繁殖することがないようにするために、生物多様性を維持する必要があると考えられています。

経済問題は大量生産・大量消費が根本にあります。利益を求めると人件費を抑えることが最も効果的だとされています。そのために、先進国では、大規模化や機械化する流れとともに、発展途上国などに低賃金労働を強いる状況が生まれました。今では、先進国が開発途上国の貧困に加担していると考えられています。そのため、貧困は経済の問題だとも言われています。また、貧困により自分が望む人生の選択ができていないという意味で人権の問題だとも考えられています。さらに、大量生産・大量消費を背景に、密漁や乱獲、プランテーションや森林伐採など、生物多様性が脅かされる状況が生まれています。つまり、経済が環境にも大きな影響を与えているのです。

社会問題は一言でいうと人権問題のことです。発展途上国への支援をするだけでなく、経済問題の中でも触れたように、先進国が人権問題の根本である、大量消費・大量生産とそれに関わる低賃金労働の問題を解決する必要があると考えられています。

ESG投資

金融機関が投資をする際に投資先の「環境・社会・ガバナンス」についての財務データを元に評価して投資をすることです。金融機関が融資の判断をする際に、環境への配慮をしているかが問われる時代が来ています。この背景には、パリ協定により気候変動に関するルールが厳格化されたことと、投資家が「社会的に意義があり持続可能なビジネスに投資する」という流れが生まれたことの2つの要因があります。日本においても、経団連が2017年11月8日、企業行動憲章を改定し、大企業・中小企業へ、気候変動を考慮したビジネス活動を推進するように働きかけている。

ビジネスとは

経済合理性や経済性にに基づき、プロダクト・サービスを通じて、顧客に価値を提供することです。顧客への価値提供は、欲しいという人のニーズに応えている（貢献している）と意味で、社会貢献そのものだと考えています。一方で、それが倫理的に良いと思えるかどうか、SDGsでは問われています。

イノベーションとは

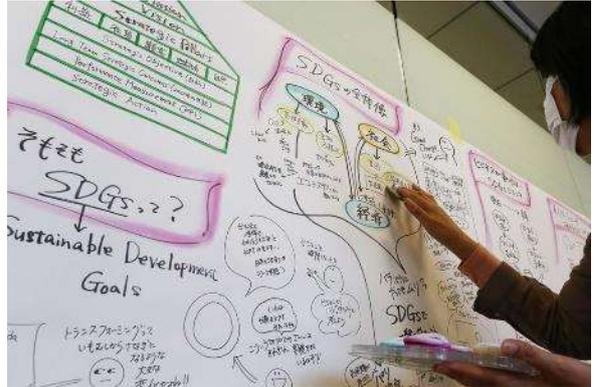
イノベーションは「ビジョンと具体的な制約条件によって生まれる」と考えています。言い換えると、イノベーションは「生み出そうとしてやっていない」ということです。具体的な制約条件をクリアしながら目指すビジョンに向けて舵取りした軌跡そのものが「イノベティブ」であるということです。イノベティブなものを生み出すためには、自分たちに課せられている具体的な制約条件を見つけ出すことが第一です。それをもとに、どう乗り越えていくのかを考えていきます。私が戦略策定に関わっているパタゴニアの場合は「二酸化炭素排出をしない」「バージンリソース利用NG（すべてリサイクルリソース）」という制約条件があり、それをクリアするために製品が生まれ、それがイノベティブだと評価されています。

サステナビリティを実現するビジネス

目指しているのはSDGsやESG投資を実現するようなサステナブルなビジネスです。もともと、組織・集団活動は、社会課題解決活動（NPO・NGO、環境保護、ソーシャルビジネス）・社会貢献活動（既存ビジネス）に取り組んでいます。一方で、その活動は環境・社会への悪影響も及ぼしています。コンビニ弁当の購入、長時間労働、など挙げればきりがありません。このような悪影響を具体的な制約条件として捉え、ここを起点に制約条件をクリアするようなビジネスを実現しようとすることで、サステナビリティを実現するビジネスに到達することができます。

<参加者の主な感想>

- ・環境問題(SDGs)、組織での意思決定、パタゴニアの事例、教育など、幅広く一見関連がないようなテーマを紐付けながら、体系的に整理して話を聞くことができた。
- ・コンセンサス型意思決定やバックキャストの具体的な例も交えたお話が非常に良かった
- ・SDGsについて理論的な話だけでなく、実体験に基づくお話を伺えたことが非常に有意義でした
- ・今まではSDGsという言葉だけがひとり歩きしていたが、受講によりSDGsというそもそもの考え方・組織内での取り入れ方などを学ぶことができた
- ・廣水さんの学ぶ姿勢に衝撃を受けた。学ぶことの重要性を再認識した。
- ・とても広い視野で物事を考えることを教えてもらえました。またビジネスの仕組みや経験談をたくさん聴けたことで自分の立ち位置でのイメージがしやすかった



2-7. 講座5：未来をつくるリサーチデザイン

<概要>

未来に向けたアクションには、その前提となる「知見」が必要です。この講座では、ソーシャルイノベーションの考え方と、それを基盤とした知見を得るためのリサーチの視点と手法を学びます。

日程：10/27(日)10:00-17:00

場所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

講師：西村勇哉さん

内容：講座、演習（フィールドワーク）

<主な内容>

社会課題とソーシャルイノベーション

社会課題とは「予見しきれなかった負の外部性（副作用）によって起こるギャップ・困難」です。一方で、ソーシャルイノベーションとは、社会課題が起こった状況に対して、課題への対処と同時に、対処から得られた新たな知見を次に繋げ、課題が解消した未来社会を見通しながら、その実現に取り組む行為です。

課題を扉に

課題は「より良い未来を検討し、模索し、構築を試みるための”扉”」として見る。課題への対応に終始するのではなく、課題を起点に過去を検証し、未来へ仮の回答を生み出していくことが肝心です。その際、課題に対しては、避けるのも良くなければ、すぐに解決に動き出すのも早計だと考えています。まずは「今何が起きていてどんな気づきや学びが得られるのか」を知ることから始めていきます。これをしないと何度も課題の抽出と解決案づくりというプロセスを続けてしまい、膨大な労力だけ使われることになってしまいます。さらに、今起きていることを批判するという、一見ネガティブにも感じられるプロセスを経ることで、今をより良くしていくための問い、つまり、本当の課題が生まれると考えています。

フィールドワークとは

言語化されていない感覚、背景となるストーリー（自伝的自己意識）、暗黙知、世界観を、インタビューや行動観察によって見出すことです。まだ語られていない・文章化されていない新たな発見を、断片的なヒントを手掛かりに見出す行為だとも言えます。

フィールドワークの進め方

1. フィールドノートを取ってくる：見かけた事物、風景、町の中にあるちょっとした出来事、人々の行動、人々の態度、人々の関心、など。
2. メモは事実情報と閃きで分けて取る：事実情報と閃きの2つについて大量のメモを取る（後では思い出せないつもりでメモを取る）

分析の流れ

1. 客観的出来事、主観的インサイト、を付箋に記入
2. 客観的出来事（付箋）をグルーピングし、グループ名をつける
3. 主観的インサイト（付箋）をグループに追加する

分析のポイント

- ・ポイント1：なるべく細かく分類する。まとめることではなく、分けることを目的にする。
- ・ポイント2：まずグルーピングして後から名前をつける。分析をしてみないとわからない、後から生まれる発見を見つけることを目的にする。
- ・ポイント3：読むだけである程度グループの内容がわかるような名前をつける。名前は抽象化するのではなく代表性をもたせる。10-15文字程度の短文にする。

分析の観点

町や人々の行動からどのような課題や違和感、関心を得たか。客観的出来事のまとめ、主観的なインサイトのまとめを振り返り、自分たちが取り組むテーマを考え、どのような新たなテーマが得られたのか。

<参加者の主な感想>

- ・新しい文脈から異なる価値へのジャンプを生み出すという考え方は、過去への振り返りや現在の取り組みのなかから視点を変えることで導けるということが理解できた。
- ・提案したい案件への共感を生むために、何をどういう順番で話すのか、受け手に印象づける手法、インパクトを改めて学んだ。
- ・客観と主観を完全に分けてメモするやり方。一人で探究心を持ってまちを歩く方法がわかった。
- ・アウトプットの時間を効果的にとってくださっているのが、常に考え、整理しながら、受講することができました。
- ・素直な感想として、内容が難しかったです。情報量が多く、専門的な表現や用語もあり、自分の中で噛み砕いて理解することが困難でした。



3. 演習

3-1. 目的と概要

講座で学んだことを活かして、実際の地域課題の発見・解決に取り組むことが目的です。具体的には、受講生が3エリアに分かれ、チームを形成し、「ヒアリング」「リサーチ」「課題発見」「解決策の提案」まで各チームごとに取り組めます。最終日には一般公開型のプレゼンテーションの場で各チームのプランを発表します。

期間：11/2-12/21

場所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

内容：フィールドワーク準備、中間発表、最終発表

フィールドワーク

目的 | 前半の講座で学んだことを活かして、**実際の地域課題の発見・解決に取り組む**
「ヒアリング」「リサーチ」「課題発見」「解決策の提案」まで行う



都市活力研究所

各エリアに
地域コーディネーター

兵庫県尼崎市



大阪市浪速区



大阪市住之江区



3-2. フィールドワーク準備

<概要>

演習に向けた準備に取り組みました。具体的には、各エリア紹介、チーム分け、振り返り、リサーチ計画づくり、です。

日程：11/2(土)10:00-17:00

場所：公益財団法人 都市活力研究所 セミナールーム

ゲスト：各地域コーディネーター

進行：NPO法人Co. to. hanaスタッフ

<内容>

各エリア紹介

今回フィールドワークを実施する、尼崎、住之江区、浪速区、の3エリア。受講生がフィールドワークエリアを決めるために、各地域コーディネーターから地域の現状や課題感についての共有がありました。また、適宜質疑応答することで疑問点を解消していきました。以下に、各エリアの現状と課題感を記載する。

尼崎

現状

- ・シャッターが多い商店街
- ・商店街の理事会に提案して、やりたい人の手挙げ方式でイベントを実施
- ・未来の子どもたちのために、お店はなくなっても商店街は残したい！

課題

- ・手伝ってくれる人が足りない
- ・駐輪場がない（けど、ほしい）
- ・お買い物に来た人が楽しめるアイデアがない

住之江区

現状

- ・住之江区は、北を木津川、南を大和川が流れ、西は大阪港に面する水に囲まれた地形
- ・南海トラフ巨大地震による津波発生時は、大阪市で最も早くに津波が到達するとの想定
- ・大和川氾濫時には、南港を除く区の大半が0.5～3メートル浸水との想定
- ・区内の14地域においては、自主防災組織によりほぼ毎年、防災訓練を実施

課題

- ・相対的に地盤が低く、水に囲まれて地形であり水害リスクが高い
- ・少子高齢化が進んでおり、自主防災組織の役員層も高齢化している。

浪速区

現状

- ・入れ替わりの多い人口
- ・高い単身者世帯の割合
- ・低い15歳以下の割合
- ・急増する外国籍住民

課題

- ・今までのコミュニティでは対応困難な状況
- ・『自立』ではなく区役所など行政や地域貢献に関心のある企業やNPOなど各種公益活動グループと町会などの地域活動の「連携」の関係をつくる。
- ・引っ越してきたばかりの人（特に単身者）や町会に入っていない若い子育て層、外国籍住民でも気軽に参加できるテーマ型自治活動の必要性。

チーム分け

各自の希望を優先して3つのエリアに分かれました。結果として、3エリア、5チームが誕生しました。（尼崎、住之江区、浪速1、浪速2、浪速3）

浪速区チームは希望者が多かったため3つのグループに分かれました。グループ分けの方法は受講生たち自身で話し合いを進行し、主体的に決めてもらいました。

振り返り

フィールドワークで実践すつための知見をまとめるために、これまで受講した講座の振り返りを実施しました。主に「気づき、学び」「活かしたいこと、大事にしたいこと」の2つを各自が言語化しました。その後、言語化した内容を各チームで共有しました。

リサーチ計画づくり

約2ヶ月間にわたるリサーチに向けて、以下の流れに沿って、チームごとにリサーチ計画を作成しました。

- ①これから「やりたいこと」「話していきたいこと」「必要なこと」を洗い出す
- ②内容を時期ごとに分ける（例：来週中にすること、中間発表までにすること、それ以降にすること、など）
- ③チームメンバーでフィールドワークや打ち合わせの日程を調整する
- ④チーム内で役割分担する

<参加者の主な感想>

- ・これまでの学びを共通言語としてチームで話すことが更に深い学びになりました。
- ・スタンスだけ伝えて委ねる、誘導しない、空気読んだ対応を求めない、など、これまで講座で聞いた内容を実際にこのようにされているのか、これが余白か、とすごく勉強になりました。
- ・過去の講座についての振り返り時間があることで、頭の整理ができた。過去の講座内容を取り入れながらチーム分けのプロセスをふめていた。
- ・振り返りワークで、他の人が印象として持っていた要素を共有できたのは、学びをより刻み付けることに効果があった。



3-3. 中間発表

<概要>

リサーチの進捗共有と課題点の共有・検討をすることを目的に中間発表を実施した。

日程：11/30(土)13:00-17:00

ファシリテーター：NPO法人Co. to. hanaスタッフ

以下の流れに沿って5チームが順番に発表した。

- ・持ち時間20分（10分発表、10分質疑応答）
- ・質疑応答は受講生同士が行う
- ・コーディネーターから各チームへコメントをフィードバックする

<内容>

各チームのプロジェクト案とそれに対する感想・質疑応答・コメントをいかに記載する。

●尼崎チーム

テーマ：商店街を活性化させるためには？

プロジェクト：アンケート大作戦（イベントに対して商店街店主の方々がどのようなことを思っているのかを調査する）

感想：探りたいことを明確にしつつ、一方で店主からの協力を得やすい内容にすること、そのバランスを考えてアンケート項目を考えていく必要があると感じた。

感想：アンケートに協力すると良いことがあると思ってもらうことが大事だと思う。アンケート結果をどう使うのか、それにどんな有益なものになるのか、を一緒に提案できるといいと思う。

質問：イベントは商店街の人がみんな参加することが前提のものですか？

回答：有志の人たちで運営している

コメント

- ・商店街理事会メンバーへ「SMDメンバー」ができることを聞いていたが、自分の課題を必ずしも意識化・言語化できているわけではない。リサーチ項目をつくることから商店街の人たちに参加してもらうことで本質的な課題を見つけていく方法もあるのではないか。
- ・手法として、アンケートなのか、ヒアリングなのか、を検討することが必要かもしれない。
- ・店主ではなく、イベント参加者や買い物客などにヒアリングすることで、商店街が持つ強みや魅力が言語化されるのではないか。それを活かした活動をデザインする方向もあるのではないか。

●住之江区チーム

テーマ：津波等の水害時にマンションを活用した垂直避難を実現するためには？

プロジェクト：リサーチ途中のためなし

質問：ヒアリングをした2つのマンションに住んでいる人たちのそれぞれの年代は？

回答：70代が多いと聞いているが、自治会等での把握などがいないため、正確な数は把握できていない。それも1つの課題だと聞いている。

質問：現在実施されているイベントや取り組みはどのように広報しているのか？

回答：チラシや貼り紙など。

感想：現状だと垂直避難ができない理由がコミュニティがないためだとなっているが、それに集約してしまうと課題がみえなくなるので、もう少し細かく見た方が良いと思う。

質問：コーディネーターが不在というのが課題とでてきているがコーディネーターがいるマンションはあるのですか？

回答：そのようなマンションはない。マンションの住民と地域の人たちをつなげるコーディネーターがいないことを課題だという声がある。

質問：課題のレベル感がバラバラだと感じているが、どのように扱うのか？

感想：どこに焦点化していくのがこれからの課題。チームで検討していきたい。

コメント

- ・限られた時間の中で、どこに焦点化してリサーチを進めるのかを検討してもらいたい
- ・先進事例として紹介しているがどのあたりが先進なのかを整理することでこの事例の強みを明らかにし資源としていかしてもらいたい
- ・地域の資源をリサーチすることで課題や解決策がよりクリアになると思う
- ・ヒアリング対象者の方の課題だけでなく、地域の他の方からのヒアリングも必要だと感じた

●浪速区1チーム

テーマ：浪速区の魅力を伝えるためには？

プロジェクト1：「OMORO-728（なにわ）」なにわオモロイ活動の情報発信ラジオ

プロジェクト2：「な・に・わ・庭」なにわ地域のブランディングに向けたプロジェクト

質問：「OMORO-728（なにわ）」のプロジェクトをやりたい・参加したい人はいるのですか？

回答：まだプレーヤーがいるわけではなく、アイデア先行で進めている。この内容をもとにどれだけ巻き込めるかをフィールドワークを通して検討していく。

質問：「な・に・わ・庭」は既存のプラットフォームを活用するのか、新たなプラットフォームをつくるのですか？

回答：新たなプラットフォームをつくることを考えている。すでに活動している人たちに関わってもらえるもらえるものを考えている。

コメント

- ・庭のメタファーは面白い。一方で、庭でいいのか問題はある。なぜ庭なのかをこれから考えてもらいたい。
- ・ビジョンや 이슈が整理されていて分かりやすい。一方で、ターゲットがぼんやりしているので、もっと深めてほしい。
- ・なぜ人と人、人と情報がつながっていないのかが、浪速区で活動していてもわからない。浪速区なりの理由がそこにはあると思うので、引き続き探る必要があるように感じる。

●浪速区2チーム

テーマ：浪速区の資源を活かすためには？

プロジェクト：浪速区の資源を活かした謎解きイベント

質問：謎解きイベントは地域を豊かにイベントなのか、地域の課題解決をするイベントなのか？

回答：浪速区にいる人が浪速区を再発見する、浪速区以外の人たちが浪速区の魅力に気付ける、そんなイベントにしたい。また子どもたちが浪速区に愛着をもてるようにもしたい。

コメント

- ・外国人の方々のコミュニティは一定ある。その中で情報収集もしている。なぜ地縁型のコミュニティと外国人コミュニティが交わる必要があるのかを再度検討してもらいたい。
- ・地域によって街の雰囲気が違う。課題に合わせてエリアを検討することも必要だと思う。
- ・謎解きをする意図が見えない。謎解きをすることが先行すると本質的な課題解決には繋がりにくい。仮説をもって検討を進めてほしい。

●浪速区3チーム

テーマ：浪速区の単身外国人が地域とのつながりをつくるためには？

プロジェクト：単身外国人が浪速区の地域資源とつながるプラットフォーム型アプリ開発

質問：アプリ作成後に継続的に運用していく予定なのか？

回答：提案して終わりにはしたくない。その落とし所を検討している。

質問：単身外国人がリアルでつながれる仕掛けはあるのか？

回答：現在は検討していない。自分たち（チームメンバー）の強みを活かしたプラン（アプリ開発）であるが、具体的な課題は絞りきれていない。

質問：プラットフォームをつくる目的やメリットは？

回答：単身外国人と地域資源とのマッチングをすること。つながりをつくれるところがメリットだと考えている。

コメント

- ・ヒアリングから課題を絞り込めていない印象。課題を明確にすることで解決策としてのプランが変わってくると思う。
- ・つながりがないというニーズはつかめているが、その周りで起きていることや課題感をもう一步踏み込んでみてほしい。
- ・外国人という大枠から、単身外国人に絞り込めていることで、ニーズが分かりやすくなっていると感じた。フィールドワークの声の中に、深める切り口がすでにたくさんある。あとはどこに焦点化して追加リサーチをしていくのがポイントだと思う。チームで引き続き検討してほしい

<参加者の主な感想>

- ・フィードバックを頂けて、新たな方向からの視点が加わった。
- ・他のチームの取り組み方、実践の仕方がすごく参考になりました。

- ・それぞれのチームの進行状況がわかったのが良かった。アプローチの仕方が様々で参考になりました。
- ・チームにより視点が変わるので、同じテーマでも解決法が違うようになるのが、とてもおもしろいと思いました。



3-4. 最終発表

<概要>

「大阪市住之江区」「大阪市浪速区」「尼崎市三和本通り商店街」。3つのエリアでフィールドワークに取り組んだメンバーによる「公開プレゼンテーション」を一般公開形式で実施しました。

日程：12/21(土)11:30-16:00

場所：グランフロント大阪 ナレッジサロン プレゼンテーションエリア

ゲスト：各地域のコーディネーター

ファシリテーター：NPO法人Co. to. hanaスタッフ

<主な内容>

最終オリエンテーション

プレゼンテーションに向けた最終確認のために、受講生向けのオリエンテーションを実施しました。全体の流れと注意事項等を確認しました。また、プレゼンテーションに臨む受講生に対して、これまでのSMD登壇講師からテキストメッセージ、及び、オンラインメッセージをいただきました。

イントロダクション

Social Mirai Design の趣旨について、NPO法人Co. to. hanaの西川氏から、説明がありました。その上で、公開プレゼンテーションの趣旨と流れについて、進行から説明をしました。その後、9月からのSMD活動の様子をまとめた動画と写真から、これまでの活動の経過を共有しました。

プレゼンテーション

尼崎チーム、住之江区チーム、浪速区1チーム、浪速区2チーム、浪速区3チーム、の順番でプレゼンテーションを実施しました。各チームが1ヶ月半をかけて取り組んだ「フィールドワーク」「インタビュー」「課題の発見」「解決策の立案」までの内容を、プレゼン資料と共に発表しました。各チームの発表後には、地域コーディネーターからのコメント、参加者との意見交換を実施しました。全チームのプレゼンテーション後には、地域コーディネーターからの全体講評を実施しました。

交流ワークショップ

受講生と参加者との交流、ソーシャルデザインへの理解の深化、受講生のSMD講座の振り返り、以上を目的として交流ワークショップを実施しました。まず、4～5名のグループに分かれ、プレゼンテーションやSMD講座を通して気づいたことや感じたことを共有しました。次に「ソーシャルデザインで大切なことは？」というテーマをもと、同じグループで対話する時間を設けました。最後に、受講生と参加者それぞれが「ソーシャルデザイナーとしての最初の一步」についてシートに記入し、全体で共有しました。

ラップアップ

公開プレゼンテーション、及び、SMD講座の締めとして、公益財団法人都市活力研究所の三本松氏に全体講評をいただきました。

<各チームの発表内容>

●尼崎チーム

プロジェクト名：子どもによる商店街ツアー

設定した課題：

- ・尼崎市の三和本通商店街ではイベントでの盛り上がりが見られているが、来場者が顧客に結びついていない。運営は外部の人に頼っている。イベントに協力する店舗が一部であり商店街店舗内でも温度差がある。
- ・関西国際大学生が商店街内で子どもの居場所づくりを行っており、地域の小学生が通っている。
- ・地域リソースである関西国際大学生・地域の小学生を巻き込み、商店街を愛する地域の方々のスキルを活用でき、商店街加盟店に対して付加価値が出るようなコンテンツを実装することで、それぞれの立場の困り感を解消することができるのではないかと。
- ・子どもと大学生が協力して各店舗の“売り”などの情報をアンケート・聞き取りにて情報収集する。
- ・商店街ツアーは先行事例があるが、NPOや地域の方が主体である。主役を子どもたちとすることで新たなコンテンツとしての価値を出す。

地域コーディネーターのコメント：

一段と商店街を楽しみなくなってきた。どんどん商店街は寂れていっているが、これからもなくしたくないもののひとつ。ぜひ私たちも一緒に楽しんでいけたらと思う。

質問：大学側の教員や組織の中の人たちで関わりを持っている人がいるのか、それとも学生たちが自由にのびのびと関わっているのか？

回答：大学ゼミの事業の一環として、尼崎市の事業募集に応募され、実施されている。地域と大学とをつなげていきたいとの強い思いを持って取り組まれている。

質問：「5年後のビジョン」とあったが、5年経つと学生の大半も卒業して入れ替わりがある。育てていく観点で見ると地域に残る人たちは必ずしも学生ではないのでは。プロジェクトを継続していく上での商店街側のメリットは何か？

回答：5年後のことは正直分かっていない部分もある。仮に今回のプロジェクトが実現しなかったとしても、地元小学校の総合学習のプログラムとして取り組むなどの派生はあるのかなと思っている。

質問：このプロジェクトに大学生はどれくらい関わり、どれくらい意見が反映されているのか？

回答：現状はゼミの先生に話をし、これから学生に下ろしていくという段階。やるとなった場合は大学生に全て考えてもらい、私たちはそれをサポートしていきたいと考えている。

●住之江区チーム

プロジェクト名：祝ってつながるHAPPY BOSAI DAYプロジェクト

設定した課題：

- ・住之江区新北島地域はマンションや市営住宅が建ち並ぶ住宅街で、大和川沿岸の海拔ゼロメートル地帯。そのため、災害時における津波や高潮・洪水による浸水被害を受ける可能性が高く、防災についての意識をより高く持つ必要のある地域である。
- ・地域住民の防災意識は高いものの、積極的に何かに取り組んでいる住民は少ない。先進的に取り組んでいるマンションはあるが、他のマンションや全体に広がっていない。

- ・防災に関して課題意識を持つ地域プレーヤーへのヒアリングを通じ、地域内での防災活動をつなぐコーディネーターがいないこと、垂直避難時の住民同士の関係性ができていないこと、学校園と地域との関係性が希薄であることが分かった。
- ・災害時には一時避難として垂直避難が必須であるが、垂直避難では地域住民・市営住宅住民同士の助け合いが必要。しかし横のつながりがなく、それぞれのコミュニティをつなぐ人や場がない。
- ・地域に開かれている場所であること、世代を超えた多様なコミュニティが創出できるのではないかと、園児避難にあたっての保育士と市営住民との関係性づくりの優先順位が高いのではないかと、この考えから「保育所」に着目し、保育所を中心としたつながりづくりを第一歩として取り組む。
- ・市営住宅の住民を対象とした「誕生日会」「防災絵本づくりワークショップ」を保育所で実施する。市営住宅の住民と保育士・園児が顔見知りになり、災害避難時のサポートや自然と助け合う関係性をつくる。そうした取り組みを中心に、地域全体で防災意識を向上することを目指す。

地域コーディネーターのコメント：

私たちでは思い浮かばないような可愛いプランを考えていただいた。保育所に目をつけたのがそこにいくのかと思い、やってみようと思った。本来区役所がコーディネートしていくべきかと思うが、まだまだ小さな単位まで手が伸びていないのが現状。こうした具体的な案をいただくと、これをモデルにしてやってみようというように思う。ぜひ参考にさせていただきたい。

質問：市営住宅と保育所との関わりについて実現可能性があまり見えてこなかった。それぞれの規模感や年代構成などを知りたい。

回答：市営住宅は比較的大きめの規模。4棟に分かれており、全て合わせると恐らく400世帯程度。保育所は概ね130名程度が在園している。市営住宅の年齢層については不明であるが、現地調査では高齢者が多かった印象がある。

質問：プロジェクトに対して思ったことや、こうしたいなというビジョンや想いは？

回答：ヒアリングで最も印象に残ったのが「コーディネーターがいない」ということであつた。官のコーディネーターはいても、民間のコーディネーターが不足している。外部から行政ではできないサポートをできる人材がまだまだ足りていないと感じた。

●浪速区1チーム

プロジェクト名：naniOne

設定した課題：

- ・浪速区には外国人、教育、子育て、貧困、孤立、治安、住居等、さまざまな課題がある
- ・地域コミュニティの課題解決に向けて自主的に個別で動いている人たちはいるが、何をやっているかお互いに知らない状態であり、もったいない状況である。
- ・コミュニケーションのプラットフォームを通じてそれぞれで活動されている想いを持った方々の意見が集まれば、小さな活動が大きな活動になっていたり、まちを良くしていきたいという想いを共有できるのではないかと。
- ・「naniOne」を通じて個人の活動が行いやすくなり、活動がさらに活性化していく。浪速区のイメージも向上し、住みたいと思うまちになるような好循環を生み出していく。自発的なつながりで持続可能な社会をつくる。
- ・「OMOR0728」浪速区民でつくるコミュニティラジオ。地域の方々が発信できる場所をつくる。防災無線が聞こえにくいという地域課題にも対応し、防災情報も流していく。

地域コーディネーターのコメント：

「みんなが総合的につながる」という結論はまさしく浪速区のだ真ん中の課題。我々としてもこうしたゴールを描いている中で、さまざまな価値観や多民族の中でまだまだたどり着けていないところに、具体性はともかくとしてゴールはここだなと改めて感じられた。また、浪速区はめっちゃ面白いところだと言っていたので、浪速区をテーマにさせていただいてよかったかなと思う。これからどんどん浪速区面白いで！ということをお皆さんに伝えていただければと思う。

質問：オンラインサロンをやるのか？

回答：オンラインサロンにしまうと「内」と「外」ができてしまう。「naniOne」という象徴の中でそれに賛同している人たちが自由に情報発信をしていく形をつくりたい。

質問：活動の場は具体的にどのようなところを想定している？

回答：活動の「場」は想定していない。ロゴやブランディングという象徴の中で、地域の人たちの自主的な活動への意識づけを目指したい。

質問：プラットフォームをつくるということか？Webサイトをつくってそこに人が集まるイメージでいたが、プラットフォームはラジオ局なのか？

回答：「naniOne」は浪速区の活動をしている人たち全体へのブランドイメージ。その活動を発信するツールとしてラジオ局を活用したいと考えている。

●浪速区2チーム

プロジェクト名：なにわの「わ」プロジェクト ～世界一周が体験できるまち～

設定した課題：

- ・浪速区は外国人居住者の割合が全国的に見ても多い。日本全体で外国人居住者の増加が見込まれる中で、浪速区は「課題先進地」と言える。一方、日本にいながら外国人とふれあえることができるというポジティブさも持ち合わせている。
- ・外国人居住者と関わる機会の多い学校現場へのフィールドワークを通じ、外国籍の保護者とのやりとりで課題が生じていることが分かった。外部調査によると、特に母親に対する支援が充実しておらず、困りごとがあっても信頼できる相談相手がない。身近に相談を聞き寄り添ってくれる人や繋がりが求められている。
- ・「なにわキッチン」各国の家庭料理を通じて地域住民との交流の場を設け、社会との接点が少ない外国籍の母親の自尊感情や自己肯定感を高める。文化などの相互理解を深める。
- ・「なにわ写真展」写真を通じて自分の思いを表現できる場をつくる。外国人目線で切り取った地域について展覧会を行う。
- ・浪速区にいながら多文化共生が体感できるまちを目指す。

地域コーディネーターのコメント：

浪速区の外国人居住者は約15%程度。外国人居住者と日本人の共生への課題については地域の方に話してもフリーズされているので、こうした取り組みがあることはいいかなと思う。ぜひ実現していただければと思う。

感想：プロジェクトに共感する外国人の方もメンバーに入れて、より多様なメンバーで考えていければいいなと感じた。

●浪速区3チーム

プロジェクト名：みんなのブカツ!!なにわくさん

設定した課題：

- ・浪速区は外国人住民が増加している。また、単身者の多い地域でもあり、外国人住民においても単身者が多い。
- ・育ってきた文化が異なることから、コミュニケーションにおいて伝わりづらい場面が多い。特に言語やルール（ゴミの捨て方など）の意思疎通ができず困っているケースがある。単身者は特に寂しさを感じているとの声もあった。
- ・「在住外国人が必要な情報を受け取り、不安なく過ごせる社会」「浪速区内で役割を持ち、“なにわくさん”として生活できる社会」を達成するため、自分の好きなこと・やりたいこと＝部活動を通じてつながりをつくっていく。単身者の社会参加を促していく。
- ・「ユーチュー部」在住外国人をターゲットに、日本のルールやマナーをおもしろおかしく発信する。

地域コーディネーターのコメント：

外国人住民とのコミュニケーションが浪速区の大きな課題の一つ。多文化共生は福祉の分野の側面もある。ルールはお互いに知らないと分からない。そういったものにIT等のツールを使って発信していったお互いに理解していくことが大事である。サードプレイスの要素を「部活」と命名して発表されていたところにセンスを感じた。

感想：YouTube以外のアイデアはあるのか気になった。例えばプロカメラマン付きのInstagram講座やツアーガイドに教わるまちあるきなども可能性としてできるのではないかと感じた。

質問：外国人支援をテーマとして取り上げた理由を知りたい。

回答：無数にある地域課題の中で、チームメンバー4人のリソースと一番相性のいい課題にフォーカスすることが、地域に一番貢献できるということを大事にテーマを考えたため。

【全体講評】

浪速区 平井氏

外国人問題の話題が突出しているという印象を受けた。この10年でものすごい変化が起こっているが、そのひとつにインバウンド問題は避けて通れない。24区の中でもニューカマーな外国人住民の比率が高い浪速区は突出した例であるところも否めないかなと思う。経済の混沌や人口減少が進む中で、次世代はお互いに理解して日本の経済を盛り上げていかないといけない。これからのビジョンとして、従来の「増えていくことが発展」「エントロピーの拡大」から「収縮していく役割」が必要であると感じている。「まち終い」と言うとマイナスなイメージだが、整理し、シェアし、お互いに理解しながら“始末”して生きていくことが次世代のまちづくりではないかと肌で感じながら仕事をしているので、そういった着眼点の発表があったことは評価できるのではないかと感じた。

住之江区 渡邊氏

みなさんプレゼンやスライドが上手で羨ましいと感じた。住之江区の提案においてもデザインも大事になってくるのではないかなと思うので、「防災×デザイン」の考え方も今後もっと取り入れていきたいと感じた。

コトハナ 西川氏

既成の枠にとらわれず自由な発想で、今までの文脈で考えるのではないジャンプがそれぞれのプランの中にあっただのが面白いと感じた。ここからいろんな可能性が生まれて突破していけるのではないかと感じた。今回のプログラムの3ヶ月半で正直崩壊するチームがあるのではないかと考えていたが、みなさんの中で違いを力に変えているようなアイデアや発想が生まれてきたのかなと感じることができた。それ自体が今後社会課題の解決や地域を盛り上げていくために欠かせない部分であると思う。普段同じ価値観や得意なことを持っている人が集まりやすい世の中で、そうでない活動を3ヶ月半してきたことは大きかったのではないと思うので、いろんな現場で継続していただければと思う。出していただいた提案をぜひ前に一方で進めていってほしいと期待している。

<参加者の主な感想>

- ・他チームの発表を聞くことで自チームのプロセスとの対比ができ、新鮮な驚きと発見があった。
- ・公開プレゼンテーションがあることでチームのまとまりが増していた。
- ・アイデアに対してオーディエンスから思いもよらなかった指摘があり、学びになった。
- ・スケジュールや環境から言って当然ではあるが、全体的にアイデア出しにおわりがちなことが、何か物足りない。



4. 結果

4-1. アンケート結果

全講座終了後に、受講生に対して「良かったところ」「改善点」「その他感想」の3つの観点で自由記述式のアンケート調査を実施した。内容は以下の通りである。

良かったところ

- ・座学と実践がセットになったプログラムであったことが良かった。
- ・講師の質が極めて高かった。この価格とは思えない。
- ・講座で学んだことを共通言語として、チームで話ができ、フィールドワークへとつなげられた。
- ・座学の内容がとても良く、提案をつくるたびに何度も参考にした。各自について話すワークが何度もあって、面と向かって話したことがなくてもみんなをなんとなく知っている状態が居心地が良かった。
- ・自治体と連携を行い実際にアクションを起こすことが出来たのが魅力的だった。

改善点

- ・前半講座・後半ワークとせず、織り交ぜていくのもひとつかもしれません。まず自由にやってみてどのように修正するかを学ぶ方が身になる場合もありますし、せっかくの講師陣から提案にアドバイスをいただくチャンスも増えます。学習効果の観測もしやすいかもしれません。
- ・毎回、確実にグループワークを入れる。スクール形式前提の席づくりや教室の構えは、変えられるなら変える方がよい。
- ・グループワークがあるときは事前にグループ分けをしておく、意思の共有を通じて、いろんな方と仲良くなれたのではないかな。
- ・自治体との連携は魅力的だった一方で、フレームが大きい、あるいは自由度が高すぎて、一ヶ月半では、地域把握、課題発見、課題追究などの活動が難しかった。
- ・「実践」期間をもう少し長く設定してほしい。グループにもよりますが、物理的に予定が合わず、結果中途半端になった部分があったため残念。
- ・受講者のみの途中での学習会(振り返り)があってもよかった。情報量が多く消化不良感があった。
- ・最終プレゼン後の振り返り会があってもよかった。チームごとの取り組み方のフィードバックが欲しかった。

その他

- ・有名な講師陣のセミナーが聞けて、懇親会で深くお話を聞ける機会もあったこと、さらに意識の高いメンバーとのこれからも続く繋がりが得られたのは非常に大きな成果でした。また半年後か1年後くらいに同窓会ができたらいいなと思いました。
- ・非常によい会だったと思います。この集まりを絶やさぬよう、継続して行くことは私達の努力も大事ですが、事務局の方々にも協力して頂けるとありがたいです。
- ・社会をどう見るか、何ができるか、考えて行動する機会を得られたことが、有意義でした。新たな視点が得られ、当初目的としていた学び直しができました。また、新しいネットワークも得られ、現在の仕事にも活用していきたいと思います。
- ・「サービスデザイン」という言葉だけが一人歩きしていた状況で、なにから手をつけ、考え、どうしていけばいいかが不明な状態だったのが、ほんの少しですが分かりつつあるかなと感じます。これで終わりにすることなく、継続して学びの場を増やしていきたいと思います。

- ・廣水さんの講義で「協力原理」を知ることができたことが大きかった。チームにいろんな役割の人がいて、それぞれの仕事やその人自身への理解や信頼があって仕事が積み重ねられる様子を実感できた。チームのメンバー全員が納得して同じ目的に向かう状態になることの大事さと難しさを感じた。自分でもやれることがあることを実感できた。これからは繋がる貴重な体験ができたと思う。
- ・会がある日は、「どんなことが学べるのだろう」と非常に楽しみになっていました。これからどのような活動をするか定まっていませんが、学んだことは汎用性が高く、何かしら自分を支えてくれるものになったと思います。
- ・お金の学びを子どもたちに伝える仕事をしていることがもうすでにソーシャルデザイナーだによって尼崎チームのメンバーに言われとても嬉しかったです。
- ・「実現に向けて具体的に動くには第三者との調整が必要」となり、展開の可能性にワクワクしていたにもかかわらず、「案は持っていけない段階」「発表には間に合わない」と切り捨てた案があったのが心残りです。研修で終わらない形にするには、実現化に向けた期間もあったほうが良いと思います。
- ・提案系のグループワークでは、ある程度経験値を積むとその先はできることの持ち寄りになってしまう。

5. まとめ

5-1. 成果と課題

<成果>

本プログラムを通して、以下の成果が得られた。

- ・参加者の満足度
各講座、及び、全体講座について、受講生の満足度が高かった。
- ・プログラムについて
講義で学んだことを演習で活かすという本プログラムの設計が機能した。
3ヶ月半という期間において、知識のインプットから実践プランのアウトプットまで実現できた。
- ・コンテンツについて
実践的な知見をもつ講師陣による講義が参加者の学びや意欲を高めることにつながった。
講義でのインプットが、演習時にコミュニケーションを円滑にするための共通言語となっていた。
- ・演習について
地域課題について実際に提案を行えることが参加者の意欲を高めることにつながっていた。
行政や地域住民と共に課題解決に取り組める体験そのものが参加者の学びにつながっていた。
- ・広報と募集について
広報のツールと募集の手順を工夫することによって、ソーシャルデザインについて学びたい層へプログラムを認知してもらうことができた。結果として、比較的若い世代、かつ、様々なバックボーンの人たちに受講してもらうことができた。
- ・その他
地域コーディネーターがいることで地域の現状把握やリサーチ導入がスムーズに行えた。
受講生自らが活動エリアを選ぶことで主体性を高めることにつながっていた。

<課題>

本プログラムを通して、以下の課題が抽出できた。

- ・コンテンツについて
講義の組み方（レクチャーとワークショップのバランス）やグループ分け（事前に分ける／分けない）などは、工夫の余地があること。一方で、講師ごとに講義スタイルがあるため、どこまで事前の調整をするかは検討の余地がある。
- ・期間について

1ヶ月半というフィールドワーク期間では、リサーチやプラン立案について、消化不良感が生まれるチームがあること。これについては「消化不良感」を抑える必要性はある。一方で「期間」については、受講生の動ける日程には個人差があることや、長期化することでの意欲の低下、なども考えられる。これらの要因等を加味して検討することが必要だと考える。

・プログラムについて

自主学習会や振り返り会など、学びの質を高めるため声があがっていた。これについては、プログラムに組み込むとともに、コーディネーターが学習会の後押しをするなどの工夫が必要だと考える。また、立案したプランを実装するまで取り組めない、という意見については、本プログラムの趣旨をふまえつつ、どこまでプログラム内で実践すべきかについて議論していきたい。

5-2. 今後に向けて

今年度の実践を受けて、本プログラムの社会的ニーズが一定以上あることが推察できた。それを受けて、今後は、今年度の成果と課題を活かす形で、引き続き本プログラムを実践していくことが何よりも求められている。そのためには、「講義については講義そのものの設計はもちろん、講義後の振り返りや自主学習会など、学んだことを整理し意味づける機会をもうけること」「演習については、実装までも視野に入れた検討をしつつ、実現可能な期間設定を行うこと」「引き続き、行政や民間と連携した実践型プログラムをつくること」「受講生が今後もソーシャルデザインに関われるようなフォローアップの手立てを講じること」を検討していく必要がある。加えて、今年度は第1回プログラムということもあり開発的なコストを含んでいた。次年度からも継続的に実践していくためには「企業協賛」「助成金・補助金」等を活用しながら「財源の拡充」を図ることで持続可能な人材育成プログラムの基盤づくりをしていく必要もあると考える。

6. 資料

6-1. 最終プレゼンスライド

別途資料1に添付

6-2. 各講座の感想

別途資料2に添付

6-3. SMD講座全体の感想

別途資料3に添付